

千代田区男女共同参画センター情報誌

MIW通信

23
2008



特集1 山根基世さんに聞く「ことばの力」
特集2 ルポルタージュ 経営を担う女性たち
MIW 10年の歩みとこれから

パープルリボン（DV や虐待をなくし暴力のない世界をアピールする紫色のリボン）を集めて MIW が制作したキルト
2005 年から 2007 年までに計 6 枚のキルトができました

「MIW」は千代田区男女共同参画センターの愛称です。M は Man（男性）、I は Intercommunication（情報や意見の交換）、W は Woman（女性）という意味です。男性と女性の間には、いつも I（自分らしさ）と愛（思いやり）をもって、対等な新しいパートナーシップを創造してほしいと願っています。

山根基世さんに聞く 「ことばの力」

5月7日、MIWの新庁舎移転1周年を記念して、講演会を開きました。元NHKアナウンス室長で、現在は「ことばの杜」を設立し活動している山根基世さんにお話し頂きました。テーマは「ことばの力」。職場や地域や暮らしの中で、自分を表現して周りつとつながることは、社会を変えていくことばについて、一緒に考えました。聞き手は、明治大学准教授で、千代田区の男女平等推進区民会議のメンバーである堀口悦子さんです。

山根基世さん×堀口悦子さん

LLP（有限責任事業組合）「ことばの杜」代表

明治大学情報コミュニケーション学部准教授

堀口 山根さんはかつてNHKの「はんさむウーマン」という番組に出演されていて、私はひと言も聞き逃すまいと見ていた覚えがあります。

山根 あの番組は、はじめに働く女性をターゲットにした番組です。バブルがはじける直前で、女性たちはとても元気でした。でも女性たちのちょっとした肩肘を張った活躍の仕方を見て、元気であるがゆえに背後には苦勞もあるだろうとの思いでつくった番組です。

その時私は、40歳を過ぎていて、キャスターをやれと言われました。でも責任者は私と同じ年の男性のチーフプロデューサー。決定権は彼にありました。20年以上も働いて



きて、テーマは働く女の問題。番組の中で私が表現したいという思いがいつぱいあるけれども、これがどうしても通らない。けっして間違ったことを言っているつもりはないのに、会議でも無視されたり嘲笑されたり、なかなか受け入れられないんです。

そのとき、私自身がきちっとことばの力を持たなくてはだめだと気づかされました。ちゃんと原稿が読めてインタビュアができるといったアナウンサーとしての専門能力を磨いてきても、組織の中で人がどう動かせばいいのかを学ぶ機会がないまま、人を率いていく立場になった時、自分のなかに

いかにことばがないかを痛感したんです。「自分のことばを持たなければ人はついてこない」と。20年働いて生きてきて、そのなかで体験から学んだ、自分の頭で考えた、本当に自分が心の底から思っていることを、けっして感情的にならずきっちりと論理的に、しかも相手の心に届くことばで言わなくてはだめなんだと学んだわけです。

堀口 なるほど。相手に伝わることばですね。

山根 ええ。そしてもうひとつ、人は誰でも胸に「自尊心」という一匹の虫を飼っている。それを踏みにじってはいけません。誰に対しても丁寧に接し、誰がどんな意見を言っても一回飲み込み、反対があつたら、相手を傷つけないように代案を出すようにできるだけ自分に課すようにしました。

女性 組織で働くということ

堀口 組織のなかで、女性が働いていく難しさですね。

山根 そうなんです。女が何か自分の思いを表現していいこととしたときに、一番ネックになるのは、「男のコケン」ということばだと思いましたね。

山根基世さんに聞く「ことばの力」



山根基世さん

山口県生まれ。1971年、NHK入局。女性手帳、ニュースワイド、関東甲信越・小さな旅、はんさむウーマン、土曜・美の朝、新日曜美術館、ラジオ深夜便を担当。NHKスペシャルのナレーションでは、「人体」や「映像の世紀」のシリーズの他、「里山」など多数を担当。2005年 女性初のアナウンス室長。2007年 NHK 退職。現場での体験をもとに、日本語の話しことば、子どもたちのことばを育てるために有限責任事業組合「ことばの杜」を設立。

堀口悦子さん

明治大学情報コミュニケーション学部准教授、国際女性の地位協会理事。専門は、ジェンダー法学・ジェンダー論。千代田区男女平等推進区民会議委員。

〈男のコケン〉ほど、女にないものはないんです。女性が男性に言われたことを言われたとおりにやっていると抵抗はない、OKなんです。でも、今の日本で女性がか自分の思いを遂げようと、自分の意思を持った時、目の前に壁が立ち現れるんです。それが組織の壁、男社会の壁っていうものなんです。

同時に、組織の中での発言力を持つためには、女性たちのなかで生きる意識を改革しなくてはならないと思います。

自分のミッションに気づく

堀口 「はんさむウーマン」以前は、いわゆる女性アナウンサーとして歩む道があったのですか？

山根 そうね。30代半ばのある日、デスクから呼ばれて、「ニュースも読んで、インタビューもやって、一通りNHKの女性のアナウンサーとしてやる仕事全部一巡しちゃったよ」と言われました。これからどうする？ と。女性アナウンサーとしては「アガリ」ということです。

そこで、放送を職業とすることの意味は何なんだろう、私たちがここでやるべきこと

は何なんだろうということをはじめに考え始めた。

戦後50年目の時期、この50年間、日本の街や村の片隅で市井の女性たちはどんなふう生きてきたのかを伝える番組をやったときに、「ああ世の中にはこんなに胸に溢れるほどの思いを持った人がいる。そのことを伝えなければ、死ぬに死ねないという思いを抱えながら伝えるずべを持たない人たちが大勢いるんだ。それにひきかえ私たちは……」——そのことに気づいたときに、この人たちの思いを伝えたいと心の底から思えた。そして、どこの番組であれ、とにかく伝えることができればいいと、自分が定まり、自分が救われたと感じました。と同時に、本当にやりたいことが見つかったとき、自分の非力さにも気づいた。

そして、私のこんなナレーションじゃ、あの人の思いはちゃんと伝えられない。もっとうまくなりたいたいと女性アナウンサーが集まって朗読やインタビューの勉強会が始まったんです。女性たちの自己改革というか、意識改革が始まっていたわけなんです。

堀口 自分自身のミッション（使命）とパッション（情熱）

を持てると、周りが気にならなくなる。それは、私も同じでした。このまま研究を続けても、就職できるのか？ 生きていけるのかと悩みました。でもそういうときに、なぜ私はジェンダー（社会的な性のありよう）関係の研究をしてきたか、女性を含めて子どもも大人も共生できる多様で生きやすい社会にしたかったと気づいた時、私は私の使命を見つけた。それが生きがいになって、私も周りが気にならなくなりました。

山根 そうなんです。わたしの人生と仕事がかチッとこみ合って、それ以後の仕事は私にとって単なる仕事じゃなく、私自身が生きることと一つになってきた感じでした。

堀口 山根さんは、NHKで女性で初めて、500人も率いるアナウンサー室の室長になられました。

山根 私の先輩で、定年までアナウンサーだった女性は4人だけでした。57歳で定年と思ったら、突然声がかかった。たぶんその時、「はんさむウーマン」のときの自分の苦しみや女性アナウンサーと一緒に始めた研究会の経験がなかったら、引き受けなかったと思います。

音なしの国 日本

堀口 ことばについて言えば、今、日本の社会に怒りはあるけど、「大丈夫ですか？ 失礼、ごめんなさい」といった声の掛け合いがないと感じます。一種、異様な空間だと思うのです。

山根 よく日本は「音なしの国」になったといわれます。本当に声を発しないんです。「ありがとう」や「ごめんなさい」のひと言が言えない。私はそのことばをちゃんとと言える子どもを育てたいと思っています。

今「ことばの杜」という活動をしていますが、自分の気持ちを表現できず、他の人とことばによっていい関係を結ぶことができない子どもたちに、話しことばをきちんと身につけてほしいと思っています。ことばの力が欠如していることによって、その人の人生が変わってくる。誰もが自分らしいと納得できる幸せな人生を全うできる世の中にしたい。一人ひとりが周囲の人とい関係構築のできることを、そうやってほしいと思っています。

「ことばの力」



ことばにして伝え合う

堀口 まさしくその通りですね。ところで、パートナーや男女の間のことばについてお聞かせください。

山根 うちの夫はどちらかといえど、うちはどちらかといえど「ありがとう」っていう方だと思います。

でもね、私が一日仕事して帰ってきて、自分は休んでソファで新聞読んだまま。食事ができれば食べて「ありがとう、ご馳走様」とまたソファに行く。それが何回か続いた。私は悔しくて悔しくて。2人で暮らし、相手が大変な思いをしてる時に、よくひとり

新聞読んでいられると思った。「よし！ これは言ってる」と、もう自分の中に怒りがカーッと渦巻いてきてね。でも、それがなかなか言えないんです。とうとう、外でお酒を飲みながら、「経済的にも自立してる二人が一緒に暮らしてるのに、どうして女

というだけで私が家事を全部しよいかまなきやいけないのかなあ」と冷静に静かに言っただけですが、なぜか目から水が流れ落ちてね。相手は言われて「そうか」と納得していました。ことばにすることで、だいぶ変わってきました。

やっぱり、夫婦だけじゃなく、人間の関係において、片方が不満を持っているときはきちんことばにして相手に伝えなければわからない。夫婦は本当に本音をちゃんとぶつけ合わないと、いい関係は結べないと思います。

社会を変えていくことば

堀口 最後に、社会を変えていくことばの力についてお聞かせください。

山根 先ほど子どものことばを育てる話をしましたが、ことばを考える時、いちばん大事なことは自分のことばを持つことだと思っています。それは、自分の目でものを見、自分の頭で考えるということです。どこかでマスコミが書いたり話したりしたことばをあたかも自分の意見のごとく思い込んで話している人がいかに多いか。私は長い間、美術の番組をやってきて400人を超える

参加者からの声

ことばがたらない、ことばが過剰…。
もっと、ことばの力を身につけたい——
〈ことばと私〉を話します。

■ 結婚して20年、空気のような存在になっている妻。気がつく、「なんでわかってくれないんだ」「こっちの気持ちも考えてほしい」と感じている自分がある。でも、そんな気持ちをことばにするのはめんどくさい、てれくさい。ある日、娘に言われた。「お父さん、ちゃんと気持ちはことばにしなくちゃわからない。お母さんと話したら…」うーん、娘は見ていたんだな。ことばが足りないこと。(40代・男性)

■ ある日「なんで、こんな仕事もできないんだ」と上司から頭ごなしに言われました。突然の大声、しかも職場のみんながいる前で。頭が真っ白になってことばがでません。ちょっと待って、私だって言いたいことはあるのに、時と場所を考えてほしい。何も言えずに、ただ一方的に怒鳴られた時間。冷静になって思った。自分の気持ちをことばで伝えたかった、でも、相手が聴かないモードだったら言えないよ。ことばと態度は別物じゃないって感じます。(20代・女性)

■ 結婚した当初、夫に家計のことを相談したら、「俺に考えろっていうのか？」と不機嫌になりました。「そんな…」2人で生活しているのに、と思いつながら、それ以上言えませんでした。それ以来、夫には相談せず家のことは自分一人で切り盛りしてきました。でも、飲み込んできた気持ちは重く澱のようにたまってきます。どこかで言いたい。ようやく夫に手紙を書いてみました。「そんなの早く言ってくればよかったのに」。夫は家計は私の分野、手を出したら悪いと思っていたというのです。ああ、なんという勘違い。以前からことばのキャッチボールができていたらよかったのに。(50代・女性)

■ 今、私が生きていく上で、ライフジャケットになっているのが〈ことば〉です。これまで、家族や夫婦の間で傷ついてきました。うまく人と付き合えない、なぜかいつも傷つき、よかれと思ったことが裏目裏目に出てしまう。人間関係に悩んできました。ある時、自分と同じ悩みについての本を読みました。そこで出会ったことばは自分のモヤモヤした気持ちをぴったりと表してくれていました。ことばを見つけることができれば、自分自身が少し安心していられます。(30代・女性)



アーティストに会ってきしたが、彼らが共通して悩み苦しんでいたのは、自分の目でのものを見ることの難しさでした。それはことばともつながっています。つまり、いつも誰かの借り物のことばや借り物の考えに寄りかかっている間は自分のことばにはならない。

旧来の固定観念・既成概念の中でしかものを考えなくなる。そこから自由になるために自分のことばを紡ぎだすってことが必要だろうと思うんです。もう一つ、日本人は自分の発言なんか世の中変えるわけがないというふうにあきらめてるんです、最初から。

私の友人で40年ニューヨークに暮らす女性が、「アメリカでは、一人ひとりの発言が世の中を変えるって信じている」と心の底から言うんです。私は自分が発言することによって、世の中を変えることができる、ことばの力を信じる子どもを育てることがすごく大事だと思います。

子育てでも介護でも、苦しいなら苦しいと声を上げていい。ことばの力というのは、正しいことを正しいと言い、間違っていることを間違っているときちんと声に出せる力だと思います。自分が体験から学んだ深い深い思いのこもったこ

とばを論理的に、しかも相手の心に届くように語った時、本当に世の中を動かすことができる。その典型がキング牧師のことばだと思います。

キング牧師の時代、白人からあれだけ差別を受けても、「私には夢がある。私の幼い4人の子どもたちがいつの日か肌の色によってではなく、その人となりによって人間的判断をされる国に生きるであろう」という彼が自分の体験から絞り出すようにしてすくい上げたことば。これに感動しない人はいなかったでしょう。このことばがその後の公民権法という人権を保障する法

に向かつていく流れをつくるわけですよ。ことばには世の中を変える力がある。私はあのことばを思い出すたびにそう思いますね。

堀口 ありがとうございます。アメリカの公民権法の話をしてくださって本当によかったと思います。実はアメリカの憲法には男女平等が規定されていないんですが、今お話に出てきた1964年に制定された公民権法によって男女の性の差別も禁止されるようになったのです。これから一人ひとりのことばの力への信頼を大切にしていきたいと思っています。

H20

私たちの身近では、DV、セクハラ、虐待、いじめ、パワハラ、モラハラなど様々な暴力が起きています。相手を尊重していれば、その人に暴力をふるうことは決してありません。社会に尊重を増やし、暴力をなくしていきたいと心から願っています。

中島幸子さん（NPO 法人レジリエンス代表）

H12

夫に対して言いたいことが言えなかったり、家事・育児を一手に引き受けてストレスをためているあなた、鍵はあなたの心の中にあります。夫のためにも、子どものためにも、家事・育児を家族みんなで分担していきましょう！ 再就職ママ、非正社員の女性も応援しています！！

森田千恵さん

（ライター・HP サバイバル☆ママ主宰）

H13

おところは女よりエライ、強いんだ
んなことは、弱い男のうそっぱち
なかず笑わず、耐えるのが男なら
もうそんな男の沽券はパスして
おとこらしさより自分らしさを
とい直す男たちが増えているそう
こそだても介護も女性と一緒に
もりだくさんの人生はすばらしい

山口正紀さん（読売新聞記者）

MIW10 年の歩みとこれから

今年の10月1日で、千代田区男女共同参画センター MIW は10周年を迎えます。この10年、多くの方々に支えられ、MIW は歩んできました。ありがとうございます。一人ひとりが性別や年代、障がいのあるなしに関わらず、自分らしく生きられる社会をめざして、これからも MIW は、皆さんと一緒に歩んでいきます。

H16

「働くこと」は「生きること」、そして「人生を楽しむ」こと。自分の進む道を自分で選び、人のせいにはしないこと。あなたも、わたしも、だれもが、自分の人生を楽しめる社会をつくりたいですね。

黒瀬友佳子さん（帝人グループ 女性活躍推進室長）

H11

男たちよ。自分ひとりで会社を担い、家庭を守る。そんな生き方を問いなおそう。つらいことはつらいと言おう。悲しいときには悲しみの涙を流そう。「泣き顔がすてき」と、女たちは呼びかけています。自尊感情を大切にすることで、他人への思いやりが生まれます。

中村彰さん（メンズセンター運営座長）

H20

私たちは、些細なことから誤った信念を持ってしまふことがある。そして、誰かがそれを変えようとすると、意地になって反発してしまう。「男なんだから…」「女のくせに…」実は、そんな時に必死になって守ろうとしているのは、崩れかかっている小っぱけな自尊心なのだ。

金子雅臣さん（労働ジャーナリスト）

H19

プロップは「すべての人が持てる力を発揮し支え合うユニバーサル社会の実現」をめざして活動しています。性別は勿論、年齢や障害の有無や文化の違いをも超えて支え合うことのできる日本にしたい！ という思いを、たくさんの人と一緒に行動で表していきたいなっ(^O^)/~

竹中ナミ（ナミねえ）さん
（社会福祉法人プロップ・ステーション）

H19

もうひとつの2007年問題をご存知でしょうか？ 一斉退職した団塊の世代が、あと15年ほどすると、要介護年代に入ってきます。共働き世代の団塊ジュニアたちは、男女どちらも同じ確率で介護休業を取る可能性があります。しかし今「介護休業を取ります！」と言って問題なく男性が休める企業、復帰後に以前どおりキャリアアップしていける企業がどれだけあるでしょうか？

実は今、女性たちが育児休業を取り、きちんと職場に戻るしくみづくりをすると、15年後は、男女問わず、育児・介護など、どんな事情を経ても継続して活躍しつづけることのできる職場環境ができあがるんですよ。そんな未来のためにMIWさんの活動を今後も期待します！

小室淑恵さん（株式会社ワーク・ライフバランス 代表取締役社長）

H12

「千代田区女性史」(全3巻)に登場する明治・大正の女たちは生きいきと輝いています。思慮深く、旧習を打破する勇氣に満ちています。21世紀を担う千代田区の女もまた、かくありたいものです。

江刺昭子さん(女性史研究家)

H11

女も男も、仕事と家庭と平等を!「そんなのはぜいたく」という20世紀から、「それはあたりまえ」の21世紀へ、あなたの一步を踏み出してください。家庭でも、職場でも、地域でも、今すぐできることがいっぱいあるはず。MIWはきっとその力強いよりどころになるでしょう。

中島通子さん(弁護士)
(昨年、中島さんは事故で逝去。MIWを応援してくださった方でした。ご冥福をお祈りします)

H18

この世に同じ顔の人間がいないように、人生の色合いも様々。そんなかけがえのない人生を愛し、互いに尊重し合う時、人は性別も年齢も人種も越えて共感を抱く。その時、きっと暴力は必要なくなる、他者へも自分へも。それは誰もが、いつでもどこでも始められる第一歩。

末永蒼生(たみお)さん
(色彩心理学者・「色彩学校」主宰)

H17

分かっているようで、実はよく知らないのが自分のカラダ。せっかく美しいところを持っていても、その魅力に気づいていないケースがほとんどです。あなたは自分のスタイル(内面・外見)に自信がありますか? 'もっと美しく、今以上に素敵になりたい'と…。

橋本明子さん(女性の護身術Wen-doインストラクター)

H15

男性はつらくても歯を食いしばって妻子を養う? 女性は孤独でも家庭でじっと耐える? 互いが相手を不幸にするこんな男女分業から楽になるときです。女性が生きやすい社会は男性も生きやすい。「女が上がれば男が落ちる」のゼロサム型発想を変えましょう。

竹信三恵子さん(ジャーナリスト)

H17

敗戦によって初めて得た「自由」「男女同権」に感激し希望に燃えた青春。あれから60年。夢見た社会はこんなもの? 権利と一対の「義務」「責任」を置き忘れ、付和雷同の国民性は相変わらず。今立ち止まって沈思しなければ男女共同参画社会はおろか逆行の危機とおもいませんか?

小谷文子さん(ちよだ女性団体等連絡会事業部副部長)

H14

21世紀の晴耕雨読ってどういうことだろうと考えました。お金がある間は遊び、お金がなくなったら働く。これだけです。男も女も晴耕雨読にもどれば、子育ても介護も楽しめます。その中から21世紀の男女は、それぞれのセクシュアリティを再発見し確立していくことでしょう。

竹永睦男さん(介護プロデューサー)

10年間の

男尊女尊 メッセージ

設立以来毎年、MIWの事業に関わっていただいた方々に「男尊女尊メッセージ」を頂き、パネルを作成してきました。その一部をご紹介します(肩書きは当時のままです)。

H18

男女の差なく、皆が自分にあるユニークな才能や能力、個性をしっかりと伸ばし、活かすことができるような社会の確立を目指すべきである。男性・女性を平等で同権の立場として扱うようになれば、男女個々の能力をうまく発揮できる、バランスの取れた社会となる。

ハンネ・クナルビク・川名さん(オスロ大学大学院・修士(日本学))

H13

男・女に関係なく、その人らしい生き方が、まず基本になればならない。男女共同参画社会は男も女も人間として、自由に、真摯に生きた結果として生まれるものでありたい。男と女が力を出しあうことで、よりよい人間の社会をつくり出せるのでは…。

羽田澄子さん(映画監督)

の主な取組み

2004



福祉まつりに参加「MIW チャレンジワールド」



講座「負けない自分になるう」で護身術を体験



*千夜一夜「今だから知りたい男女共同参画」



MIW ライブラリー

2005



MIW通信 18号「対談：住田裕子さんと石川雅己区長」



講座のポスター



*千夜一夜「アロマで暮らしを楽しみませんか?」



講座「子どもと親のCAPワークショップ」



2005年 パープルリボンプロジェクト

2006



MIW通信 19号「色にこめられた私を知る」初のカラーページ



大手町カフェでの北欧から学ぶ講座



講座のポスター



展示「ブータンの笑顔」国民総幸福を求めて」

2007



エンパワーメント講座。テーマはライフ・ワーク・バランス



岩波ホールとの共催「映画ポスター&色紙展」



移転オープニングでの石川区長の挨拶



移転後の交流サロン

2008



デートDV防止啓発講座「愛していれば許される?」



男女共同参画週間展示「自分のMerry、世界のMerry」



講演会「山根基世さんに聞く『ことばの力』」

5月 新庁舎に移転

新庁舎移転記念シンポジウム「ナミねえとレモンさんに聞いてみよう! 元気の秘訣はなんですか?」



MIW10年間

1998

10月1日MIW誕生！

男女共同参画センターが
神田和泉町にオープン



MIW 開設 記念
シンポジウム



MIW 通信創刊

講座「地域と家族」



1999



区民と町をレポート。映画
監督の羽田澄子さんと高齢
社会をテーマにまち歩き



インターネット教室



*千夜一夜「東京の酪農家」



ビデオサロン

2000



MIW 通信 7 号を使って
作ったセクハラ防止ポスター



ふれあい祭り。スタッフ手
作りの人型人形で職業体験



エンパワーメント講座。
テーマは女性と仕事

2001



ふれあい祭り



男女共同参画週間展示「平
塚らいてふと『青鞥』の女
たち」



共催事業で与謝野晶子につ
いての講演会と展示



区内の高校への出前講座
「恋愛について語ろう！」

2002



講座「江戸時代の食に学
ぶ一女と男のスローな生き
方ー」でのそば打ち体験



登録団体交流会での意見を
まとめて



MIW 開設 5 周年記念シン
ポジウム



MIW通信でライブハウスで
若者のエイズ検査をする医
師を取材



DV 防止の世界のポスター
展

講座「あなたの身近な DV」
では利用者とともに寸劇を
制作



経営を担う女性たち



現在、日本で働いている約 6400 万人のうち、約1割 626 万人は自営業。そのうち、女性が占める割合は 24.6%。自営業の 4 人に 1 人は女性が担っています*。今回は、区内で経営を担う女性たちを訪ねました。

*「労働力調査」総務省統計局 H20.7 月

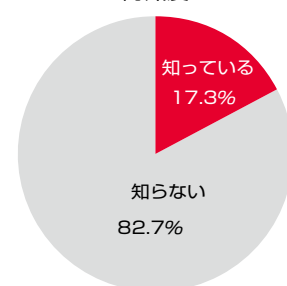
思いを形に変える仕事

九段の坂を上がったマンションの1室、白を基調にしたシンブルで心地よい空間がツノダさんのオフィスです。

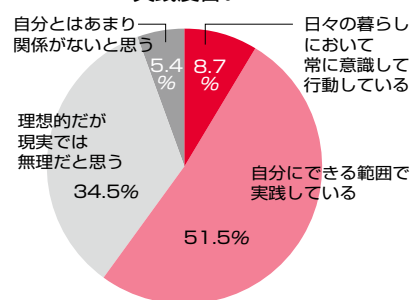
ツノダさんが経営する「ウェブプラネット」は、新商品の開発のためのコンセプトづくりや企業の事業展開のサポートを手掛けています。形になっていない消費者のニーズや思いを、商品という形にする仕事です。依頼会社は食品や化粧品から、住宅、外食産業までさまざま。働いているのはすべて女性です。

ツノダさんは自分自身を「コンセプト・ナビゲーター」と呼んでいます。依頼企業をドライバートとしたら、ツノダさんは助手席のナビゲーターだということです。同じゴールを目指しながらドライバートとは

ワーク・ライフ・バランスの認知度



実践度合い



(N=10,309) 株式会社ウェブプラネット調べ 2008 年

違う視点を提供し、一緒にゴールを目指すのです。

「ナビゲーターの視点とは消費者の視点です。まだ形になっていないけど、あったらいいなという思いを感じ、そこからニーズを見つけ、思いを形にかえる「もの」へとつなげる、そうした仕事は私たちの仕事です」(ツノダさん)

たとえば、二世帯住宅の間取りをどうするか？ 最近では「姑」と「嫁」が互いに遠慮しあうことで、関係がギクシャクしてくるのではとの思いを、アンケート調査やデータで裏付け、ドアを2つにし、最初からあえて遠慮せずに暮らせる空間をつくるというような提案です。できてしまえば「なるほど」と思うことも、家族の関係性や家族のなかでの「私」の位置をどのようにしたのかと深く関わっているとツ

ノダさんは話します。

ワーク・ライフ・バランスは男性の家庭進出

ツノダさんたちの発想の原点は「きちんと生活し続けること」。だから、結果としてクライアントへの提案は、仕事を中心のこれまでの男性の発想を転換していく方向に進みます。具体例としては、クライアント企業の社員に対するロールプレイ(簡単な役割体験)。普段、調査の分析データを扱う社員、商品を開発する技術者に、実際にからだで感覚を動かして使う側になってもらいます。そうすることで、「頭で考えることと、実際に使いたい・使ってうれいという気持ちをつなげる」のです。「男性たちにもっと料理をしましょうと言っても、複雑で使いにくい調理器具だったら、取り組もうという気持ちもおきず、やり続けることもできません。だから、使いやすくて楽しい「もの」を作ること、男性の参加を増やすという方向を考える。私たちは、商品が生き方を変えられていると思います。その生き方とは、男性も女性も一人ひとりを大切に、きちんと生活をし続けることだと思います」(同)

会社の制度「離婚見舞金・不妊治療助成金」

経営者としてツノダさんは「人を育てることは自分を育てること、自分の経験から、若い人たちを応援したい、それが経営者としてのミッション（使命）の一つ」と話します。

その一つが、離婚見舞金の給付。勤続年数によって金額は異なりますが、入社3年以上だと3万円。1回に限って、離婚・調停の時には半日休める制度も導入しています。

「私自身が離婚の経験者。MIWの相談室にもお世話に

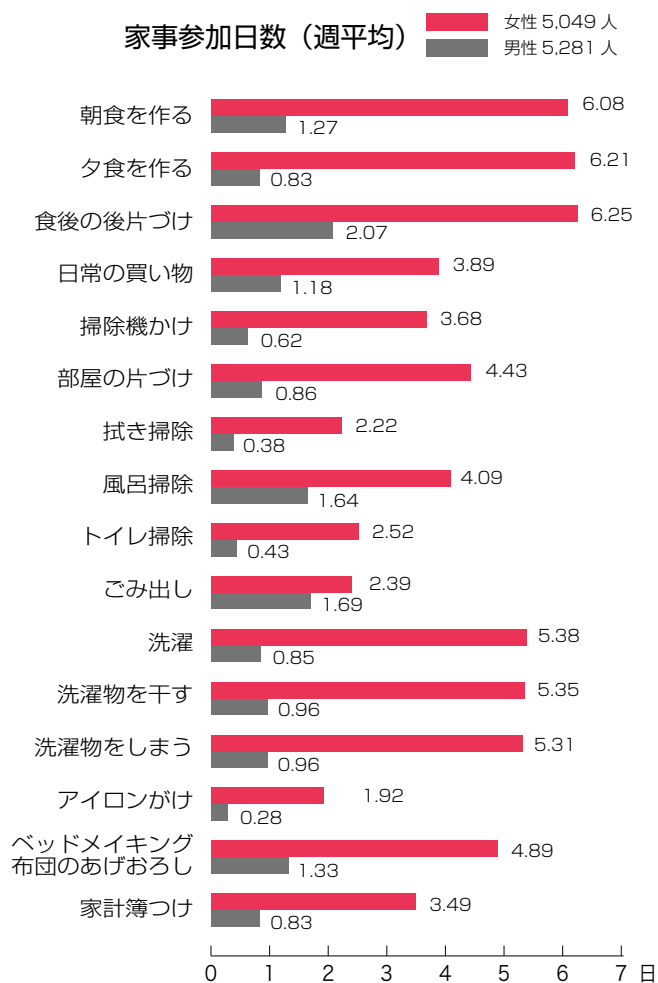
なりました。7カ月の息子を抱えて離婚しました。その後、シングルマザーで子どもを育ててきました。離婚からシングルに戻るのも人生の新しいスタート。そう思って、この制度をつくりました」とツノダさんは話します。もちろん、離婚を奨励しているわけではありません。大変だけど離婚

をポジティブにとらえて応援したい気持ちからだそうです。「私自身、わらをもつかむ思いで、MIWの相談室に行きました。あの時の経験がなかったら、今の自分はなかったかも。会社も男女共同参画センターも女性の力をエンパワメントする場でありたい」と話されました。

商品が生き方を変える

「きちんと生活し続ける」という
発想力を仕事に！

家事参加日数（週平均）



ツノダさんたちは独自の調査もしています。

株式会社ウェーブブラネット調べ 2008 年



依頼企業の社員とのワークショップ。
中央がツノダさん

ツノダフミコさん

商品開発コンサルタント
株式会社「ウェーブブラネット」代表取締役

大学卒業後、商業施設の開発会社に入社、マーケティングを学ぶ。93 年に 29 歳で個人事務所「ウェーブブラネット」を設立。新商品のコンセプト開発、企業の事業展開などを手掛ける。取引先は食品、住宅、外食産業、飲料、化粧品業界など。会社は女性 15 人。区内飯田橋地域在住。職場には自転車で行ける距離。小学 1 年生の息子と 2 人暮らし。



お気に入りの場所を たくさんつくる

西本千尋さんの会社の仕事は、まちづくりのプロデュース。地域の人たちや商店街、行政と一緒に「自分たちの住みたいまち」をつくります。商店街や企業が所有するビルの壁面やアーケードなどを、まちづくりの趣旨に賛同する企業に「まちのメディア」として販売。景観に配慮し、まちづくりの財源もつくりだすこの「ストーリー広告事業」は今、多くの注目を集めています。

たとえば、さまざまな色や形や内容が混在するビルの広告。その広告をどのようにするかを西本さんの会社が事務局となって、まちづくりにつなげていきます。

まず、商店街の人たちや住民、依頼主と一緒にまち歩きを体験し、広告の数、種類、内容などを調べ、まちの景観について一緒に考えます。依頼主は行政や商店街。千代田区では、丸の内界隈のアーケードの景観づくりに取り組みました。

「地域の価値を自分たちで高めていけば、まちも企業も潤い、住んでいる人にとってもプラスになります。『目立てばいい』『こんな広告、嫌!』で

終わらせるのではなく、マイナスをプラスに変え、自分たちのお気に入りの場所を増やしていく取り組み」と西本さんは話します。

とはいっても、意見の調整、全体のマネジメントは大変。時にはクライアントと意見が対立することもある。けれど、基本はそのまちに暮らし、働く人たちの意見です。

「ともすれば、画一的になりがちな日本の商店街。でも、駅から15〜20分も歩けば、そのまちならではの風景があり、多様な豊かさに驚かされます。私は多様な選択肢がある社会が、住みやすいまちをつくることができると思います。だから、さまざまな人が関わって、さまざまな意見がでることにとっても意味がある。まちづくりは協議の場。その場をマネジメントするのが私たちの仕事です」(西本さん)

もちろん、効率性や採算性といった点から見れば、企業経営と反対方向にあるといえるかもしれません。でも、経営と志を一致させる方向を西本さんは自然と求めて歩んできたのです。

自分の命と交換できる仕事

西本さんは、高校生の頃、ハ

自分の命と 交換できる仕事 地域・行政・商店街 とのまちづくり



プロデュースした新宿駅前商店街カフェにて

にしもと ちひろ 西本千尋さん

まちづくりのプロデュース
株式会社ジャパンエリアマネジメント 代表取締役

大学を卒業後、2001年、鈍行列車で全国を旅し、尾道のまちの豊かさに感銘を受ける。2003年、商店街ネットワークに研究員として参加。2005年、ジャパンエリアマネジメントを設立。経済産業省などの事業を受託。会社は千代田区が小規模企業を支援する神田錦町のちよだプラットホームスクエアにある。従業員は3名。

ンセン病の治療に尽くした医師・神谷美恵子さんの本に出会いました。そこに、「自分が死ぬとき、自分の命とやってきた仕事を交換する」ということばを見つけました。その時、人に何かを返せる仕事をしたいと強く思ったといいます。

その後、大学を卒業してから、一般企業への就職活動はせず日本中を旅し、さまざま

なまちを歩きました。全国の商店街が出資する「商店街ネットワーク」での就業経験の後、地域をまきこんで病児保育事業を展開するNPO法人フーレンスの駒崎弘樹さんと出会い、2005年に今の会社を立ち上げました。

かつて訪ねたアメリカではまちづくりの女性マネジャーが沢山いました。「まちのこと

は女性に」と生き生きと働く姿に比べて、日本のまちでは、男性の陰になって、発言しない女性たちに数多く会いました。その時、「女性がもっとまちづくりに!」と強く思ったといいます。

社会貢献とビジネスを両立させる西本さん。今日も生き生きとまちづくりに取り組んでいます。

突然、画廊の経営を任されて

千代田区神保町に画廊を構えて35年。ずずらん通りから見える広いガラス越しの店内には、ベテランから若手まで、油絵、日本画、イラスト、版画とさまざまな作品が展示されています。店主の檜よしえさんに伺いました。

「30歳の時、父から突然、画

廊をやらないかと言われたのがきっかけ。絵は好きで、よく美術展には行っていたけど、まさか自分が画廊をやるとは思いもよらなかった」と檜さんは話し出しました。それとも、俳優座の女優として仕事をされていたからです。

「たまたま自宅兼父の会社があった場所で、会社が移転し

た際、店を閉めておくのがもったいないとの知り合いのひと言で画廊をすることに。店主のなり手がなかったところに、父から白羽の矢を立てられて……。何も知らずに、周りの『応援するから』とのことばに乗せられて？ 経営を任されることになったのです。だから、画廊の名前は、私の芸名からとった〈檜画廊〉なのです」

女優と画廊を35年

大好きな町で、大好きな絵と仕事を続ける



80年代、画家の丸木位里さんと



檜画廊で



ひのき 檜よしえさん

檜画廊経営

俳優座の女優として、テレビ「傷だらけの天使」「銭形平次」などの作品、「アンチゴネ」などの舞台で活躍。1973年から神保町で画廊を経営。丸木位里、丸木俊、西田藤次郎、田島征三などの作品を扱う。

知り合いの絵描きさんのつてをたよって、貸し画廊を開始。新しい作家を探すのに一苦労の日々でした。一方で、地方公演もある女優の仕事もハード。2つの仕事をこなすことは並大抵ではありませんでした。

ある日、原爆の図で有名な丸木位里、俊夫妻に檜画廊での「二人展」をお願いしたところ、快く引き受けて下さり、その後、「娘のように可愛がってもらい、考え方の幅が広がった」と言います。丸木さん夫妻との出会いもあり、「本物の絵を見てもらいたい」との思いを檜さんは強く持ち続けてきました。

経営者として責任を持つ

しかし、採算度外視というわけにはいきません。正直、資金繰りも大変でした。ある時期、フランスの作家のリトグラフを扱ってはと、ある画廊から話が舞い込みました。喉から手が出るほどの話。それを扱えば、安定した経営を望めるかもしれません。けれど、檜さんが絵の心得を教わった人から「責任は持てるのか？」と言われました。

それこそリトグラフは、サインの鉛筆の粉まで細かく調

べてみなければわからないほど、本物と偽物の区別がむずかしい。作家を知らずして、その作品が売れるのか？ そののひと言に檜さんははっとし、「作家と私とで、責任がとれる仕事だけをしていこう」と心に決めたといいます。「自分で責任がとれることが経営者」、それが檜さんのことばです。

男女平等の仕事

当時、女優と経営者の2足のわらじは珍しいものでした。けれど、どちらも檜さんには大切な仕事でした。

高校の卒業時、将来を考えた時、「男性と競争しない方がいい仕事をした」と檜さんは思ったと言います。だったら、女性でなくてはできない仕事をとって、女優を選びました。

年間100ステージをこなす女優と画廊経営の両立には、もう一つの思いがありました。大好きな神保町の一角に、大好きな絵を飾っていたいの思い……。神保町に生まれ育ち、この町を愛し、「神保町は日本一、安全で心地よい町」と言い切る檜さんは、「女だから、男だからって決めてかかる考え方は私には合わない、私は好きな仕事をしてきた」ときわやかに言い切りました。

愛していれば許される？

「恋人どうしなら、相手の携帯をこっそり見たっていいんじゃない？」「俺とサークルとどっちが大事なんだ？」—大学生の間で、何気なく交わされる会話。最近、若い世代の恋人間の暴力：デートDV（ドメスティック・バイオレンス）が増えてきています。

MIWでは7月9日に区内の明治大学と共催で、デートDVを考える講座を開きました。若い人たちと地域の人たちが一緒になって、「デートDVとは」「互いを尊重する関係とは」を考えました。学生が作った「デートDVの寸劇」とそれについての話し合い、DV被害者支援をしているNPO法人レジリエンス代表の中島幸子さんのお話。参加者は200人以上となりました。

「前から知りたかったことがわかってよかった」「寸劇も具体的でわかりやすく、相手を思うことと束縛することは違うと感じた」などの感想が寄せられました。



司会の堀口悦子先生（右端）と講師、学生



講師の中島幸子さん



学生と一般の人たちが一緒に混じって話し合い

デートDVの寸劇

明治大学の学生が身近な例を参考にシナリオ（解説付き）を考え、演じてくれました。付き合っている2人の会話です。



- ♥ それ私の携帯じゃない？
- ♠ （受信記録を見ながら）…これ誰？
- ♥ 同じゼミの男の子だよ。
- ♠ なんでメールしてんの？
- ♥ 今度ゼミでプレゼンするから連絡とってたの。
- ♠ （しばし沈黙）…で、このメールは？ 隠れて会ってたんじゃないの？
- ♥ だってゼミだから、会うのしかたないでしょう。ねえ、何やってるの！？
- ♠ アドレス消してんの。
- ♥ ちょっとやめてよ！ ケイタだってクラスの子と仲いいじゃん。
- ♠ 俺はいいんだよ！

彼はこのように彼女に厳しく、自分に甘い傾向がある。加えて、いったん怒ってしまうと手のつけようがない。



こういったことが以前から何度も繰り返されてきた。

なぜこうまでされて別れないのか疑問に思う人も多いだろう。その理由はこの後にある。

- ♠ こんなもんがあるからいけないんだろ！（バキッと携帯を真っ二つに壊す）
- ♥ え、え、ちょっと！ もうやだあ…、なんでそんなことするの？ 信じられない！



- ♥ もう、うちら付き合えないよ。
- ♠ （優しい声で）ごめん。ごめん。もうしないから許して。
- ♥ それ、前にも聞いたよ。もうやだ。
- ♠ 俺のこと嫌いにならないでよ。
- ♥ ちょっと考えさせて。
- ♠ 待ってよ。嫌いになるなんて言うなよ。
- ♥ ちょっと…、もうわかんないよ…。
- ♠ 僕を一人にしないでよ。ケイコがいなきゃダメなんだよ！

彼にこう言われると、彼女は、「私がいなきゃダメなんだ」と思い、別れられなくなってしまう。このように急に弱々しくなったり、優しくなったり、あるいはプレゼントを贈ったりする時期をDVの「ハネムーン期」という。暴力のあとにこの「ハネムーン期」があることで、デートDVの負のサイクルからなかなか抜け出せなくなってしまうのだ。

お気に入りの場所で、昔…

駿河台といえば、かつては学生の街。お茶の水橋から本屋街に下る坂の周りには、多くの大学がありました。その一角の主婦の友ビルに、女性の弁護士による女性のための法律事務所ができたのが今から43年前。設立に関わってきた市橋千鶴子さんに当時のお話を伺いました。



当時の駿河台の風景。左手奥の主婦の友ビルの4階に事務所がありました。

その7

駿河台で、日本で初の女性による女性のための法律事務所

「駿河台の事務所から窓の下を見れば催涙弾の煙がモウモウ。私たちが法律事務所を始めた頃は、学生運動が華やかかなりし頃でした」と当時を振り返る市橋千鶴子さんは今年88歳。市橋さんたち6人の女性弁護士が日本で初めての女性のための法律事務所「婦人総合法律事務所」を設立したのは、1965年（昭和40年）でした。それまで、女性が気軽に弁護士に相談に行けるころはなかったのです。「病気を未然に防ぐ予防医学のように、問題が深刻にならないうちに女性たちが相談できる場所をつくりたかった」と市橋さんは話します。

予約制で、6人の女性弁護士が週に1回、交代で相談を受けました。それは当時では珍しいシステムでした。弁

護士、妻、母親の3役をこなす女性たちが考えだした共同経営の方法だったのです。また、安心して弁護士に相談してほしいとの思いから、相談料は均一1時間2000円と明示しました。離婚や子の親権、隣人とのトラブルまで多くの相談が寄せられました。

中央大学で学んでいた市橋さんにとって、駿河台はなじみ深い街。当時、建設中だった主婦の友ビルを見て「こんなビルの中に女性が法律相談できる場所があったら…」と思った市橋さんがビルに話を持ちかけたところ、ちょうど、ビル内で医学相談・教育相談をするとのこと。法律相談は望むところと、話はトントン拍子に実現していき

ました。

市橋さんは若い時から、何か社会の

ためにと教師や医者を目指したものの叶わず、その思いを胸に抱いていました。ある日、眼にした新聞記事にくぎ付けになりました「三淵嘉子さん、女性初の裁判官になる」。それを見て市橋さんは法律の仕事、弁護士を志そうと強く思ったのです。その時、市橋さんは結婚して盛岡在住、しかも妊娠7カ月でした。けれど、妻のその想いを聞いた夫は、中央大学の通信教育のパンフレットを手渡してくれたといいます。

中大に入学し、赤ん坊を抱えての授業や試験をこなす、同級生や大学の教職員に助けられ、無事、市橋さんは弁護士になりました。女性たちのために社会に役立つ仕事をとの夢を実現させた街、それが駿河台だったのです。



設立当初のメンバー。全員、当時は全員が子育て中の母親で、3歳から18歳までの子どもがいました。左端が市橋さん。



事務所の前には、6人の弁護士の名前と1時間2000円の文字が。



自宅で仕事をする市橋さん。応接間の一角をガラスで仕切って相談室に。



隣家との境をめぐる問題で現場検証をする弁護士。

参考資料
『毎日グラフ』1968年8月11日号
『主婦の友60年史』主婦の友社
『千代田区女性史』千代田区女性史編集委員会

MIW開設 10 周年記念事業

総合テーマ「かぞえよう！ハピネス！」

記念講演会

Let's 男尊女尊！

わたしたちが幸せになる共生のカタチ

日時 10月1日（水）18:30～21:00

会場 共立女子大学3号館610教室
（千代田区神田神保町3-27）

内容 ■基調講演 落合恵子さん（作家）

■対談 落合恵子さん

山田正人さん

（『経産省の山田課長補佐、ただいま育休中』の著者）

■ミニコンサート

にしむらなおとさん・安藤哲也さん

（NPO法人ファザーリング・ジャパン）



落合恵子さん



山田正人さん

パープルリボンキルト・フェスティバル

日時 9月27日（土）～10月3日（金）9:00～19:00

（28日は休館、27日・1日は17:00まで）

会場 千代田区役所1階 区民ホール
（千代田区九段南1-2-1）

内容 全国の女性センターやグループ、利用者からのパープルリボンキルト作品の展示。

会場で、リボンを縫い付ける「リボン・カフェ」も実施。

日時 10月1日（水）14:00～15:00

2日（木）18:00～19:00

パープルリボン・プロジェクト ラン&ウォーク

パープルリボンのTシャツを身につけ、暴力のない世界をアピールする催し。

日時 11月3日（月・祝）9:30～12:00

会場 皇居周回コース（約5km、スタート・ゴールは千鳥ヶ淵公園）

定員 300名（申込順）

パープルリボンオリジナルTシャツプレゼント

申込み・問合せ

スポーツエントリー <http://www.sportsentry.ne.jp>

電話 0570-037-846

◆ 情報交流会・千夜一夜

「MIWで仲間と出会う夜」

日時 11月14日（金）18:30～20:30

会場 MIW交流サロン

内容 MIWの登録団体の方々の活動紹介と交流

定員 15人

※申込み・問合せはMIWまで（左記ラン&ウォーク以外）

MIW 相談室

MIWの相談室では、夫婦関係、男女の生き方・働き方、セクシュアル・ハラスメントや夫婦や親密な間柄での暴力などについて相談を受けています。相談は面接でも電話でも可。予約制になっています。（区内在住、在勤、在学の方対象）

◆相談日時

水曜日 第1・3・5／10:30～15:30

第2・4／17:00～21:00

木曜日 第1・3・5／17:00～21:00

第2・4／10:30～15:30

金曜日 第1・3・5／10:30～15:30

第2・4／17:00～21:00

◆電話での予約 **TEL 03-5211-4316**（女性カウンセラーが担当します）

MIW インフォメーション

◆ ワーク・ライフ・バランスを考える講座

自信をもって人と向き合う^{スキル}技術

第1回 11月20日（木）「ストレスに対処できる私になる」

第2回 11月27日（木）「人間関係に対処できる私になる」

時間はともに 18:30～20:30

会場 千代田区役所4F 401会議室

講師 内田恵理子さん（臨床心理士）



内田恵理子さん

千代田区男女共同参画センター MIW (ミュウ)

◆所在地：〒102-8688 東京都千代田区九段南1-2-1

千代田区役所10階

◆交通機関：東京メトロ東西線・半蔵門線・都営地下鉄新宿線「九段下」駅下車、徒歩5分

◆開館時間：月曜日～金曜日 午前9時～午後9時
土曜日 午前9時～午後5時

◆休館日：日曜日、祝日、年末年始

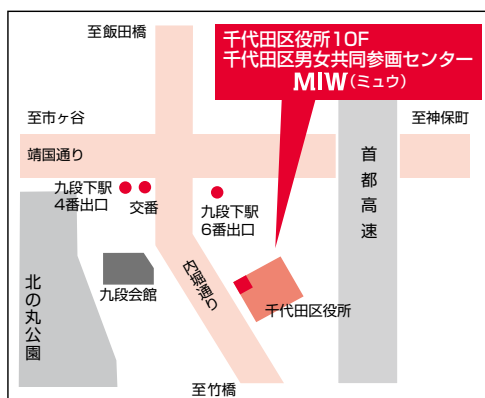
◆TEL：03-5211-8845／相談予約受付 03-5211-4316

◆FAX：03-5211-8846

◆E-mail：miw@city.chiyoda.tokyo.jp

◆URL：http://www.city.chiyoda.lg.jp

（MIWで検索してください）



●編集後記

利用者の皆さまをはじめ、関わってくださった多くの方々に支えられて、MIWが10周年を迎えられましたことを心より感謝申し上げます。土を耕し種をまき、芽が出はじめた男女共同参画。これからの10年間、美しい花を咲かせ続けられるようスタッフ一同頑張っていますので、今後とも宜しくお願いします。（M）

編集：千代田区男女共同参画センター

（株）生活構造研究所

発行：千代田区 デザイン：スタジオサラ

印刷：教文堂

発行日：2008年9月30日